



ふるいを用い、
版木に色を丁寧に載せていく

唐紙作りは、雲母粉と糊材を混ぜ合わせた顔料で色を作り、それを「ふるい」という道具で版木にむらなく載せていき、その上に置いた和紙を両の手のひらでなでるように摺りあげていくというもの。「その手加減が、部屋の電気を点けたとき、消したときに微妙に表情を変え、唐紙ならではの魅力を作りだしていく。つまり、それが職人の腕の見せどころと

「この年になっても、これで満足したと思える仕事は年に数回だけ。唐紙の奥深さを思い知らされます」と小泉さん。

王 伝統の手技

第十九回

和紙を撫でさすると、裏面に見事な文様が浮かび上がる。小泉芳松さんの手加減が芸そのものなのだ。

子供たちには「唐紙」など死語に近い。物がわからないのだ。そんな時代、伝統美を継承し続ける職人は、生きている「伝統」そのものである。

文／山川敦司 撮影／荻谷真紀



襖とは
強い個性を前面に出すものではない。
控えめな影武者なんだ。

唐紙とは読んで字のごとく、中国から渡来した紙のこと。もともとは貝殻の粉末である胡粉を紙に塗り、文様を摺り出したものだ。平安時代には経文などの書として作られ、それが「京からかみ」の起源になった。室町時代に入ると、寺社や屋敷の建築に襖絵や壁絵として使われる。一般町家の襖紙として用いられるようになったのは江戸時代中期のことだ。以来二百年——。和室が姿を消しつつある昨今の住宅事情では、襖や唐紙にお目にかかる機会がめっきり少なくなつた。「2、3年前のことですが、中学生に「唐紙ってどんなものか知っている人？」と尋ねたところ、「知っている！」と答えた生徒は40人中ゼロ。じゃ、襖は？ 調べて聞いたら、4、5人手を上げたんですが、正直、それが現実なんだと思えましたね」そんな現状を踏まえつつも、逆風の中で気概を持って伝統を守り続けてきた職人がいる。「唐七」の代表で、江戸からかみ師の小泉芳松さんだ。小泉さんは嘉永年間に日本橋で「唐七」を創業した初代小泉七五郎さんの四代目。七五郎さんは、今もその作品が英国スコットランドの博物館に展示される江戸の名工だった。◇ 「いらっしやい。遠いところをご苦労様ですね」取材前、業界の重鎮と聞いて、頑固な職人さんを連想していた私の前に現れた小泉さんは、眼鏡の奥の優しい瞳が印象的なダンディな職人さんだった。挨拶もそこそこ、さっそく仕事場へ。ところが工房に入るなり、ふと不思議な違和感を覚える。というのも、これまで「伝統の手技」に登場いただいた職人さんの多くが、道具に囲まながら仕事をしている、といった印象が強かったからだ。だが、この工房にあるのは絵の具を写す版木のほか「ふるい」と呼ばれる円形の道具と刷毛だけ。「ま、そういう意味ではタイトル通り「伝統の手技」といったところかも知れませんね」なるほど、小泉さん、うまいことをおっしゃる。

【 摺る工程 】



①花崗岩に含まれる雲母の粉を水で溶き、ふのりを混ぜて絵の具を作る。絵の具を刷毛でふるい、という丸型の道具に載せていく。雲母の調子はその日の天気や湿度によっても変わってくるという。



②色が載せられたふるいを、まんべんなく版木に写していく。



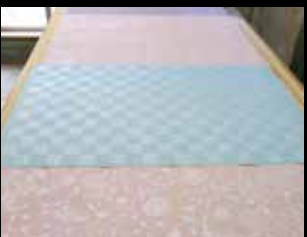
③版木の上に角を合わせて和紙を置く。



④両の手のひらでなでるように摺り上げる。その手加減によって文様はさまざまに表情を変えるという。



⑤和紙をスツとはがして、乾かせば完成。



⑥完成した唐紙。江戸時代の版木は12枚で襖1枚になるサイズだったが、戦後は大きな3尺×6尺(通称サブロク)判を使うようになった。



小泉芳松
Koizumi Yoshimatsu

1933(昭和8)年、栃木県生まれ。新制中学を卒業後、県内の電機メーカーに就職。ラジオ付き電気スタンドの製造部署に配属されたが、1年で退職。母親の勧めで、東京から栃木に疎開していた襖職人に弟子入りし、修業が始まる。3年後、親方が東京に戻ることに、1952(昭和27)年、親方とともに上京。その後、「唐紙のことを極めてみたい」との思いから親方の元を離れ、各地の襖職人を訪ねながら腕を磨く。1956(昭和31)年、24歳で先代の小泉政吉(三代目)の弟子となり、小泉流の技法を継承しながら自身で作り上げた独自のスタイルを確立し現在に至る。1991(平成3)年、唐紙の版元和紙問屋「東京松屋」と、小泉さんをはじめとする職人衆十軒とで「江戸唐紙協同組合」を結成。翌年には東京都伝統工芸品の認定を受け、1999(平成11)年には、経済産業省から、国の伝統工芸品に指定される。また、2005(平成17)年には、秋の叙勲で瑞宝単光章を授章。趣味は溪流釣り。

問い合わせ先:
東京松屋インテリア和紙ショールーム・ショップ
〒110-0015 東京都台東区東上野6-1-3
TEL:03-3842-3785
URL <http://www.tokyomatsuya.co.jp>



工場の壁にきちんと並んで置かれた、ふると刷毛。唐紙を作り出す重要な道具だ。



版木の文様。奥が市松模様に流水をあしらった「流水市松」。手前が「枝松」文様。



平成17年には、秋の叙勲「瑞宝単光章」を授与され、「身の引き締まる思いがしました」と小泉さん。

江戸からかみ

木版刷りが中心の「京からかみ」に対し、「江戸からかみ」は木版刷りのほか、文様を彫り抜いた型紙の上から顔料を摺りこむ「洪型捺染摺り」、また金銀箔などで図柄を描く「砂子手蒔き」など、多くの技法があるのが特徴。その文様も武家や町人の好みを反映した自由で粋なものが多い。



「江戸からかみ」は平成4年、東京都の伝統工芸品に指定され、平成11年には経済産業省から、国の伝統工芸品に指定された。



「江戸からかみ」の文様は、住まいや建具を引き立たせるため、強い主張を持たず部屋という限られた空間に溶け込むように作られている。(小泉芳松作、提供・東京松屋)



小泉さんの唐紙のほか、豊富なバリエーションの「江戸からかみ」が展示された「東京松屋」のショールーム。(提供・東京松屋)

逆風の中で伝統を守り続ける

代目小泉政吉さんに出会い、以来50数年、小泉流を継承してきた。「もともと襖というのは強い個性を前面に出すものではなく、あくまでも控えめな影武者者なんです。だからこそ、人間の手加減の妙が大きな役割を果たす。つまり、人間の手ほど精巧なものはないということです」平成14年、小泉さんには瑞宝単光章が贈られたが、「本人は、それでもね、マラソンの有森裕子さんみたいに、自分を褒めてあげたい」という仕事ができるのは1年に1回あるかどうか。なぜって、職人の世界には「これでいい」というものはありませんからね。職人は生涯修業、

生涯勉強ですから」世の中の流れが大量生産や大量消費の時代から少しずつ変わりつつある今、エコへの関心の高まりとともに、再び和紙の良さが見直されるようになった。部屋の灯りをろうそくに頼っていた時代、その灯りに照らされた雲母の唐紙は、文様をほのかに浮かび上がらせ、その情緒ある美しさは夜の寂しさを紛らわせた。時は流れ、暮らしが変わっても、左右されなかったのは、そこに本物の伝統美があったからこそ。雲母のほのかなきらめきの中に、「江戸からかみ」の「秘められた自己主張」を見たような気がした。

「元になる版木は江戸時代、12枚で襖1枚になるサイズだったが、震災や戦火ですべて焼失してしまふ。現在小泉さんが使用する市松をはじめ花唐草など30種類の文様の大半は、戦後、新たに彫られ、先代から受け継がれたものだ。」
「実は中学を卒業した後に栃木の電機メーカーに就職したんですが、仕事が面白くなくて1年で辞めてしまったんです。すると母が「お前は本当に三日坊主でしようがない！」と言いつつ、次の仕事を探してきてくれました……」
近所に東京から疎開してきた襖職人がいたので、弟子入りして襖職人になればいい、というのだ。
そして、翌日から修業が始まったのだが……。
「今なら早く一人前に育てよう、と手取り足取り……となるんでしようが、昔の職人という

のは決して仕事を下のものに任せなかつたんですね。そのため仕事は一から十まで、兄弟子たちの動きを見て真似るしかなかった。見習いという言葉があるんですが、文字通り「見て習う」というわけです」
しかも、弟子時代の給金は小遣い程度で、「浅草で月に2回映画観て、タバコ買ってコーヒー飲んだら、それで終わり。だからとにかく一日も早く一人前の職人として認められたかったなあ」
そんな小泉さんが、初めて仕事を任されたのが3年ほどしたある日のことだった。
「成人式を迎える少し前でした。親方に呼ばれて「お前、これやってみろ！」と。うれしかったなあ。ただ、結局それが卒業試験みたいなものだからね。うまくできないと、「お前、今まで何を見てきたんだ！」と

「元になる版木は江戸時代、12枚で襖1枚になるサイズだったが、震災や戦火ですべて焼失してしまふ。現在小泉さんが使用する市松をはじめ花唐草など30種類の文様の大半は、戦後、新たに彫られ、先代から受け継がれたものだ。」
「実は中学を卒業した後に栃木の電機メーカーに就職したんですが、仕事が面白くなくて1年で辞めてしまったんです。すると母が「お前は本当に三日坊主でしようがない！」と言いつつ、次の仕事を探してきてくれました……」
近所に東京から疎開してきた襖職人がいたので、弟子入りして襖職人になればいい、というのだ。
そして、翌日から修業が始まったのだが……。
「今なら早く一人前に育てよう、と手取り足取り……となるんでしようが、昔の職人という